

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

宙づりのハイネ

内田, 俊一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

92

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004752>

宙吊りのハイネ

内田 俊 一

I

同化によるよりはむしろ摩擦を通じて

(ハイネ「ドイツにおける宗教と哲学の歴史」)

恋愛は、ある意味では、支配と被支配の関係であり、そうであるがゆえに恋愛詩も、政治の脈絡の中にからめとられている。二人の人間の間にも成り立つ恋愛を「私的」次元のものと考え、多数の人間が存在してはじめて成り立つ政治を「公的」次元のものとして、対極に置く考え方があつた。そのような捉え方は錯覚にすぎない。そもそもこの二つは、人間の生活の別々の局面にあるものでさえない。人間は常に関係の中に生きている。孤独ということすら、関係性の中ではじめて成り立つのである。

ハイネの世界的な名声は、少なくともそのポピュラリティーは、もっぱら初期の恋愛詩に負っている、と言つても過言ではないだろう。それがなければ、たとえ彼がマルクスの先駆者としてまつり上げられようとも、またドイツ・ジャーナリズムの祖として仰がれようとも、あるいはまたフロイトに「機知」を論じる素材をふんだんに提供しようとも、彼の名前がこれほどまでに大きな、世界中に誰ひとり知らぬ者のないほどの、いわば詩人の代名詞と

なつて残ることは、けつしてなかつただらう。その甘すぎるほどに甘い、人工甘味料で味つけされたような（もつともこの人工甘味料は、奇妙な苦さを口に残すのだが）初期の恋愛詩と、その後の政治的・諷刺的な文章の間を結ぶ糸はどこにあるのか。

ハイネほどに分裂した印象をひとに与える文学者も珍しい。宗教的にも（彼は無神論者だったのか、それとも神を信じていたのか。もし神を信じていたのだとすれば、その神はいったいかなる神だったのか）、政治的にも（彼が来たるべき革命を心底待ち望んでいたことは疑いない。しかし彼がそれに恐怖を感じていたことも、同様に疑いない）、また文学史上の流派への帰属の面からも（彼はロマン主義者だったのか、それともリアリズムに分類されるべき文学者だったのか）、さながら分裂と矛盾のオン・パレードである。いかなる場にも安住の地を見つげ出すことのできない、動揺に満ちたその軌跡は、一見対蹠的に見えながらも、不思議にカフカの生涯を思い出させるものがある。

アドルノのいわゆる「傷」^[1]であるハイネの叙情詩と、その散文の間の亀裂も、そうした彼の生涯の矛盾のうちのひとつ、あるいはその最大のものとも言えよう。彼の恋愛詩になんらかの「進歩的」側面を見つけて、のちの政治的散文に無理やり関係をこじつけてみたところで、それで何かが分かったということにもなるまい。しかし人間という多面体に、脈絡が欠けていることはありえない。どんなに分裂しているように見えようと、そこにはなんらかの糸が貫かれてはいるにちがいない。

ゲーテ以後の最大の詩人と目され、十九世紀の最高の文章家とも言えるこの人物に、ドイツの文学史は、結局、しかるべき位置を与えることができずにきた。ハイネは常に文学史の宙に、その半端な位置に、吊り下げられたままである。（最近はあまり流行らなくなつたものの、かつては彼にマルクスの先駆という、「大きな」役割を付与しようという動きもあつたわけだが、これはまた別の問題だらう。）もちろんこのことに、彼のユダヤの出自が大きく与つていたことは疑いない。しかしそれだけではない。文学の分野に限らず、ユダヤの出自を持ちながら、ドイツの精神史の中に確固たる地歩を得た人間を挙げることは、けつして困難ではあるまい。むしろ彼の与える分裂

した印象が、あるいは彼に対する規定の困難さが、というよりむしろ、いかなる規定をも拒もうとする彼の精神の姿勢が、そこに与って力あったと考えるべきだろう。(そしてユダヤ的であるとは、けっして出自やなんらかの血の問題ではなく、そのような精神の姿勢の問題である。)

大きな存在であるにもかかわらず、現在に至るまで、文学史上に正当な位置を与えられていない、ただただ当惑の手つきで扱われているという点では、おそらくカフカについても同様のことが言えよう。そしてドイツの文学史が、ハイネやカフカを置く場所を見出せないのだとすれば、それは彼ら本人に責任があるのではなく、文学史のコンセプトそのものに問題があるのである。

II

ハイネを論じようとするならば、彼がユダヤ人であったという事実から、目をそらすことはできない。これはありふれた、ほとんど陳腐な言い種に聞こえるかもしれない。しかしこのことは、いくら強調しても強調しすぎることはないし、この事実の包含する脈絡の及ぶ範囲については、おそらくいまだに究め尽くされていないのである。それはけっして、ハイネの生涯の折々のエピソードに影を落としているだけではない。またたとえば『バッヘラッハのラビ』のような、ユダヤ的なものを直接テーマとした作品だけを論じることによって、論じ尽くされる性質のものでもない。一見ユダヤ的なものとは全くなんの関係もない作品にまで、そして関係がないように見えれば見えるほど、実はますます奥深くまで、ほんの片言隻句に至るまで、この脈絡の糸によって刺し貫かれている。よく言われるように、ハイネはゲーテとトーマス・マンの間のドイツ文学が生んだ、唯一のヨーロッパ・サイズの文学者だった。そしてこのことは、彼がユダヤ人であったにもかかわらず、そうなることができた、と捉えられるべきものではない。そうではなくて、ユダヤ人であったからこそ、彼はその地平に到達することができたのである。

ハイネは『メモワール』の中に、次のような少年時代の思い出を書きつけている。彼はある機会に、自分の祖父

はどんな人物だったのか、と父に尋ねた。無口な父親は半ば笑いながら、半ばつつけんとんにこう答えた。「おまえのおじいさんは小柄なユダヤ人で、長い髭をはやしていたさ。」次の日は学校で、全く無邪気にこの重大ニュースを級友たちに話して聞かせる。するとこの一ちびのユダヤ人で長い髭のおじいさんという言葉は、級友たちの口から口へと、リフレインのように飛び移っていき、ついには上を下への大騒ぎになってしまった。これを聞きつけた担任の教師が、怒りで顔を真っ赤にしながら駆けつけてくる。そして結局ハイネは、この騒ぎの全体を引き起こした張本人として、笞打ちの罰を受けることになってしまった、というのである。

この体験はしかし、歴史的に見れば、ドイツのユダヤ人にとってきわめて新しい事柄に属する。というのもハイネ以前の世代には、ユダヤ人の子供がキリスト教徒の子供たちと同じ学校で学ぶという状況は、ありえないものだったからである。ハイネは一七九七年、当時ベルク公国の首都であったデュッセルドルフの町に生まれた。ハイネの育った時代は、ナポレオンのフランスと他のヨーロッパ諸国の間で、絶え間なく戦が交わされた時代であり、その勝敗によって各国の版図も目まぐるしく変化した。ベルク公国を含むライン地方は、一七九五年から一八〇一年までと、さらに一八〇六年から一三年までの二度にわたって、フランスの統治下に置かれた。その結果、当時としてはきわめて進歩的なナポレオン法典が導入されたことによって、政治的な意味でのユダヤ人解放が、ほぼ完全に実現した。ユダヤ教徒の集団も、カトリック教徒やプロテスタント教徒の集団と並んで、対等の位置に立つことが、少くとも抽象的には、可能になった。そうであればこそ、ハイネの学校での体験のようなことも成立しえたのである。しかしナポレオンが敗退し、ライン地方がプロイセン領になるにもなつて、ユダヤ人の政治的同権は取り消され、旧来の様々な制限が復活することになる。ここに、のちのハイネのナポレオン賛美とプロイセン憎悪の起源を見ることができらるだろう。

ハイネは、十一歳年長のルートヴィヒ・ベルネとは違って、ゲッターの体験を持たなかった。彼がフランクフルトを訪れて、はじめてゲッターというものを目のあたりにしたのは、十七歳の時のことだったし、ベルネに伴なわれて、そのゲッターを隅から隅まで探索し、改めて強烈な印象を受けたのは、二十代も終わりに近づいた頃のこと

だった。⁽³⁾しかしまた一方ハイネは、ドイツ社会への統合を一応は済ませた、その後の同化ユダヤ人たちの世代とも異なっていた。たとえば彼は、すでに物心つく以前の六歳の時に、父親の手でプロテスタントへの改宗という通過儀礼を済ませ、自分自身でこの問題に苦しむことを（おそらくは）免れた、同じライン地方出身で二十一歳年少のマルクスとは違い、この「ヨーロッパ文化への入場券」の獲得をめぐる、みずからのたうち回らなければならなかった。

彼は、ゲッティンゲン大学での法学博士号取得を目前にした一八二五年、二十七歳の時にプロテスタントの洗礼を受ける。これは、ユダヤ人に対する政治的権限の撤回されたドイツにおいて、安定した市民的職業を手に入れるためには、どうしても必要な前提条件だった。もちろんハイネのような人間にとって、純粹に宗教的な意味では、どの宗派に属するかというようなことは、どうでもよい問題であったことは疑いない。しかし改宗というこの行為は、改宗しない、ということはつまり市民社会から排除されたままの、ユダヤ人大衆に背を向けて、自分ひとりだけは宿主社会に受け入れてもらおうと、おめおめとすり寄る行為だった（と、少くともハイネには意識されただろう）だけに、彼の心に深い傷を残さずには済まなかった。

彼はこの改宗の事実を、友人たちには秘密にし続ける。半年近くたって、はじめてこの事実を親しい（ユダヤの血統をもつ）友人に告げる書簡は、千々に乱れた矛盾だらけのもので、ハイネという人物の傷つきやすさが生のまま露出した、きわめて印象的な文面である。⁽⁴⁾改宗から一年近くたってはまだ彼は、同じ友人に宛てて次のような言葉を書き送っている。「私は、老フリートレンダーやベンダーフィット（いずれも、ユダヤの文化遺産を守ろうという運動の指導的人物）が年をとっていて、まもなく死ぬだろうということを喜んでいますが。そうすれば私たちは、これらの人々を確保できるのです。そして私たちの時代が、非の打ちどころのない人物を唯のひとりも示すことができない、という非難を受けずにすむのです。……私は夜たびたび起き上がり、鏡の前に立っては自分を罵倒しています。ひょっとしたら私は今、友の心をそのような鏡と見なしているのかもしれない。しかし私にはその鏡は、もはやかつてほど澄んではないように思えます。……⁽⁵⁾これほどの苦しみの代償を払って得た入場券は、

しかし実生活の上ではなんの役にも立たなかった。さらに一年余りのち彼はこう書きとめている。「私をここから駆りたてるものは、放浪の楽しみよりは、むしろ個人的境遇の苦しみ(たとえばけっして洗い落とすことのできなユダヤ人)なのです。……そして数年後彼はドイツを去り、フランスに亡命する。

ハイネはまさに、ドイツにおける同化第一世代のユダヤ人だった。ゲットーの暗い体験は、しかし隔離されたその中における、仲間うちだけの暖かい親密さをも含めて、彼には欠けていた。しかしまたその後のユダヤ系知識人たちの、かさぶたの下の傷口を覚られまいと気づかいつつも、表面上は一応ドイツの市民社会に統合された、不安な安心感とも、彼は無縁だった。彼の傷口は生涯ぼっかりと口を開けたままだった。まさに彼は「《もはやない》と《いまだない》の間に」立っていた。その、いかなるものへの依存からも引き剥がされた、真空状態のような孤独な立場こそが、社会の欺瞞を暴く彼の言葉の切っ先を鋭いものにした。ヘルダーはかつて、ユダヤ人が教養を身につけた場合の偏見のなさを強調し、現実から切り離されているがゆえに、かえってよく現実を見通すことができ、その洞察力の鋭さを称揚した。「そもそもユダヤ人は、われわれが努力しなければ脱却できないような、あるいは全く脱却できないような、さまざまな政治的判断から自由なのだから」と。ヘルダーによって期待された、理想的な知識人の原型としてのユダヤ人像は、ハイネにおいてはじめてその十全な形で体现された、と言えるかもしれない。

ハンス・マイヤーは、ユダヤ人問題をテーマとして取り上げた、ドイツの最も初期の文学作品の一つであるレッシングの「ユダヤ人たち」(二七四九)の中で、その後のユダヤ人開放の前提条件となる要請が、すでにユダヤ人たちにに向けて発信されていた、と捉える。それはすなわち「教養と財産」である。そしてその要請に基づいて、過剰なまでに教養を肥大化させた人物がハイネであり、それはちょうど過剰なまでに財産を肥大化させたロートシルト(ロスチャイルド)と表裏一体の関係にある。ロートシルトもまた、かつて王侯から与えられた保護ユダヤ人の特権に安住するのではなく、市民としての同権という啓蒙主義の要請に基づき、新たな市民社会のパスペクティヴに順応することによって、その成功を勝ち得たのだ。ハイネもロートシルトも全く同じ基盤に立っているのだ。

ハイネの教養は法外なものである。しかしそれはいかなる伝統とも結びついてはいない。(啓蒙主義との結びつきは、あくまでも理性に全権を付与しようとする姿勢に基づくものにすぎず、なんらかの伝統への組み込みを云々できるような性質のものではない。)だが伝統との結びつきこそが、伝統によって組み立てられている社会の中に、その教養人の棲息する場所を確保する。ハイネには最初から、現実社会の中の足場は拒まれていた。彼には虚空に足場を求めるほかなかった。ライヒニツキーはハイネについて、自由な文筆家という存在を、職務および制度として理解した最初の人物と評している。ハイネはその文体においても、また存在そのものにおいても、良くも悪くも近代ジャーナリズムの祖である。カール・クラウスはその有名な(もしくは悪名高い)『ハイネとその顛末』の中で、近代ジャーナリズムの悪弊が、すべてハイネにその源を発することを暴きたててみせた。⁽¹²⁾しかしカール・クラウスその人のような存在が、ハイネという原型なしに考えられないこともまた、まぎれもない事実である。

ここでもう一度、「ちびのユダヤ人で長い髭のおじいさん」にまつわる、ハイネの学校時代の思い出話に帰るとにしよう。おそらくこれが、ハイネの原体験だった。彼も別の場所で書いているように、当時のデュッセルドルフは、きわめて自由な雰囲気⁽¹¹⁾に満ちあふれていた。フランス人の手によって設立された、このフランシスコ会の修道院学校も、修道院学校というものが持つ通常のイメージからは遠く、フランス革命の影響のもとに、啓蒙主義の精神を体現するものに変貌していた。占領地域においては、一種の実験のように、占領側の理想が、しばしばその本国よりもより一層徹底した形で与えられる。あるいはこの時期のライン地方も、フランス本国よりもより一層自由で平等な社会を形成していたのかもしれない。(そもそも少年ハイネが、自分のユダヤ人の祖父のことを得意満面で言い触らしたということは、ユダヤ人であることが何を意味するのかを、この少年が知らなかったということ、あるいはそれまでは知らずに済んでいたということを示している。それほどにリベラルな社会だったということだろう。)

そのような自由で平等な学校で、しかしこの事件は起きたのである。たとえ政治的な意味での解放、同権の付与

が実現したとしても、それでユダヤ人にとって問題が解決したことにはならない。問題はまた新たな形をとって現われてくる。そしてこのことを、同権が撤回されたことによって、政治的解放以前の状態に逆もどりしたドイツの中で、つまりこれからまず政治的解放が勝ち取られなければならぬドイツの中で、骨身に沁みて知ってしまったという事、これこそが、一見分裂しているかに見える、彼の政治的発言の複雑さの最大の原因である。群衆が権力を握ることへの彼の恐怖感も、またたとえば「そもそも今日、富者に対するプロレタリアの憎しみと呼ばれるものは、かつてはユダヤ人憎悪と言われるものだった」というような洞察も、その源泉はすべてこの原体験に求めることができるだろう。

この意味でも、彼はドイツ社会の中に、戦うための足場を欠いていた。彼は虚空に浮かぶ立場から、両面作戦を、というより多面作戦を、展開せざるをえなかった。もちろん政治的解放は実現されなければならない。しかしそのために共に戦う部隊の中にも、解放が実現されたのちに現われてくるだろう脅威の兆しを、彼は発見せずにはいられなかった。こうして、いかなる党派からも離れ、いかなる党派を敵にまわすことも厭わない、絶対孤独の戦いへと、彼は追い込まれて行く。

III

ハイネのポピュラリティーに寄与しているのは、なんといってもシューベルトやシューマン、メンデルスゾーン、ブラームスらによって旋律を与えられた、彼の恋愛詩である。しかし曲を与えることの容易さは、けっしてその詩の作品としての質の高さを物語るものではない。完成度の高い詩は、むしろそれ自体の内に固有の音楽を秘めており、そうであるがゆえに、異質な旋律が与えられることを拒絶する。他者の音楽を容易に受け入れるということとは、その詩の言葉が、どこをどう入れ換えてみても、それなりの体をなすような、いわば道具としての性格を帯びていることを示している。

「本当はその言語の内にはいない者だけが、その言語を道具のように使いこなすことができる。」⁽¹⁴⁾ハイネが「ドイツ語という」この言葉こそ……愚かさや悪意によって祖国を拒まれた者には、祖国そのものなのだ⁽¹⁵⁾と書いたのは、パリへの亡命から遡ること十年余り以前、二十二歳の、はじめての散文作品においてのことだった。ドイツ人であろうとして拒まれたユダヤ人である彼が、それでもなおドイツ人であろうと欲した時、いわばその拠って立つ最後の基盤が、ドイツ語という言語だった。しかしその最後の防壁も、実は最初から崩れていたのだ。何ゆえにか。おそらくはドイツ人であろうと欲したがゆえに。ほかの人々と同じように話そうとしたがゆえに。模倣は虚偽にしか行き着かない。「同化の言語は、失敗した一体化の言語である。」⁽¹⁶⁾

先に引いたハイネのはじめての文学評論は、「ロマン主義」と題されていた。いかなる伝統からも隔絶し、精神的にいわばまっさらな白紙の状態で、歴史の新参者としてハイネが投げ込まれたのは、ドイツ・ロマン派の潮流だった。彼はそのロマン派の小道具を、実にみごとに使いこなした。その名人芸はしかし、より深い部分で、ロマン派と共有するものを持たないからこそ、彼にとって可能になったのだ。彼の恋愛詩は、伝統的なロマン派の詩によつてすでに作り上げられている、読者の期待にとり入り、おもねろうとする、いわば過剰な迎合であつて、それは、ドイツ文化への入場券を求めんとするあまりの、一種の精神的改宗の行為にほかならなかつた。

しかしこの甘い虚偽の言葉は、突如苦い真実の言葉に逆転する。読者の期待を裏切つて、そしてまたおそらくはハイネ自身の思惑を裏切つて。彼の詩においては、しばしば最後の数行によつて、それまでの詩の全体が覆され、読者は苦い幻滅へと叩き落とされる。ロマン派好みの道具立ては、一挙に全く異なつた風貌を帯びることになる。それはハイネにとつて意識的な手法だったのか、あるいは無意識の裡に彼が言葉から復讐を受けたのか。いずれにせよ、それは改宗の夢のあとに続く、深く深い幻滅だった。

彼の恋愛詩の背後に、実生活での恋愛体験を探し求めることほど愚かなことはあるまい。もちろん恋愛体験はあつたに違いない。恋愛は誰でもするのだから。しかしひとの心に深くつき刺さつて抜けない恋愛詩を書くことは、誰にでもできることではない。ハイネの恋愛詩、実りなき愛を焦点として焼き付けられたその陽画の影には、

それに対応する陰画として、拒絶され、追放され、故郷を失なった者の憂愁が潜んでいる。これはもちろん、意識的な比喩だと言うのではない。たしかにハイネは、みずからの恋愛体験を機縁として、詩を書きつけたのだっただろう。そしてそうであればこそその恋愛詩は、恋愛に悩み苦しむすべての者の心を、現代に至るまで、捉えてやまないのだろう。しかしその詩が、凡百の恋愛詩とは異なって、引き裂かれ、血を流すばかりの痛切さを獲得できたのだとすれば、それはその背景に、ユダヤ人ハイネの体験が、黒々とした陰画として存在していたからにはかならない。

IV

ハーバーマスは、「ハイネとドイツにおける知識人の役割」と題された評論の中で、ドイツの歴史の中では、大学のマンダリンともジャーナリストとも区別される意味での「知識人」というものに対して、常に否定的な意味づけしか与えられなかった次第を論じ、しかもその「知識人」のイメージが、いわば原初知識人とも呼べるハイネに向かって、敵対者たちから投げつけられた罵詈雑言から抽出されている事実⁽¹⁾に、注意を喚起している。いわばそこに、ドイツ文学の歴史になんらの伝統をも残すことのなかった、この詩人・文筆家の「ネガティブな（陰画として）作用史⁽¹⁾」を見ることができるとのこと。

ハーバーマスのこの評論は、ハイネ＝知識人像を、左翼的大学人としてのみずからの立場に引きつけすぎているきらいがあり、実際のハイネの姿からは、いささか懸け離れている趣がないでもない。しかしドイツ文化の歴史に欠落している最大のもの、そしてそうであるがゆえに、戦後のドイツにとっても喫緊の課題であるもの、いわばドイツ文化の影の部分⁽¹⁾が、まさにハイネという人物を焦点とすることによって、鮮明に浮かび上がってくるということとを、この論文は示していると言えよう。ハイネは、マルクス主義の凋落とともに消えてなくなるような、つまらぬエピソードなどではない。彼のアクチュアリティは、現代でもけっして失なわれてはいない。むしろ宙吊り

のハイネを、ドイツの文化に取り戻すことができるかどうか、今後のドイツの歴史の成否はかかっている。それはたとえば、彼の生地の大学にハインリヒ・ハイネの名を冠する、というような贖罪的行為で、どうにかなるような種類の問題ではない。生きていた時はかりでなく、死んでからもなおドイツ文化への棲息権を拒もうとする限り、ドイツという身体に刻み込まれたハイネという傷口は、けっして閉じることはならぬ。

註

- (1) Theodor W. Adorno: Die Wunde Heine. In: Noten zur Literatur I, Frankfurt a.M. 1958, S.148.
- (2) Heinrich Heine: Memoiren. In: Sämtliche Werke in 4 Bänden. München 1969ff., Bd. II, S.712f.
- (3) Cf. Heine: Ludwig Börne. In: a.a.O., Bd. IV, S.18ff.
- (4) Heine an Moser, 14. 12. 1825. In: Franz Kobler (Hrsg.): Juden und Judentum in deutschen Briefen aus drei Jahrhunderten. Wien 1935 (Reprint 1984), S.222.
- (5) Heine an Moser, 23. 4. 1826. In: a.a.O., S.223.
- (6) Heine an Moser, 8. 6. 1826. In: a.a.O., S.224.
- (7) Hans Mayer: Die Ausnahme Heinrich Heine. In: Von Lessing bis Thomas Mann. Pfullingen 1959, S.277.
- (8) Johann Gottfried Herder: Adrastea. In: Sämtliche Werke. Hrsg. v. B. Suphan, Berlin 1877-1913 (Reprint 1967), Bd. 1, S.71.
- (9) Hans Mayer: Außenseiter. Frankfurt a.M. 1975 (suhrkamp taschenbuch 736, 1981), S.335.
- (10) A.a.O., S.357ff.
- (11) Marcel Reich-Ranicki: Heinrich Heine, das Genie der Halbliebe. In: Über Ruhestörer. Juden in der deutschen Literatur. Erweiterte Neuausgabe. München 1993, S.85.
- (12) Karl Kraus: Heine und die Folgen. In: Untergang der Welt durch schwarze Magie. (8. Band der Werke) München 1960, S.188ff.
- (13) Heine: Geständnisse. In: a.a.O., Bd. II, S.569.
- (14) Adorno: a.a.O., S.151.
- (15) Heine: Die Romantik. In: a.a.O., Bd. IV, S.433.

- (16) Adorno: a.a.O.
- (17) Jürgen Habermas: Heinrich Heine und die Rolle des Intellektuellen in Deutschland. In: Eine Art Schadensabwicklung. Frankfurt a.M. 1987, S.30.